

各火山の 5 月の活動解説

【北海道地方】

めあかんだけ
雌阿寒岳〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

火山活動は概ね静穏に経過しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められない。

ポンマチネシリ 96-1 火口の噴煙量は、2015 年 6 月頃以降やや多い状態が続いている。また、ポンマチネシリ 96-1 火口近傍の地下における熱活動の活発化の可能性を示す全磁力¹⁾の変化は継続している。今後の火山活動の推移に注意が必要である。

とちだだけ
十勝岳〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

火山活動は概ね静穏に経過しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められない。

ここ数年、山体浅部の膨張、大正火口の噴煙量増加、地震増加、火山性微動の発生、発光現象及び地熱域²⁾の拡大などを確認しており、長期的にみると十勝岳の火山活動は高まる傾向にあるので、今後の火山活動の推移に注意が必要である。

なるまえさん
樽前山〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

火山活動は概ね静穏に経過しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められない。

山頂溶岩ドーム周辺では、1999 年以降、高温の状態が続いているので、突発的な火山ガス等の噴出に注意が必要である。

なお、以下に挙げる火山では、火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

アトサヌプリ〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

たいせつざん
大雪山〔噴火予報（活火山であることに留意）〕

くつたら
倶多楽〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

うすざん
有珠山〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

ほっかいどうこまがたけ
北海道駒ヶ岳〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

えさん
恵山〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

【東北地方】

あきたこまがたけ
秋田駒ヶ岳〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

めだけ
女岳では、2009 年以降拡大した地熱域²⁾が引き続き認められる。

地震活動は概ね低調で、地殻変動及び噴気活動にも変化はみられないが、地熱活動が続いているので、今後の火山活動の推移に注意が必要である。

ざおうざん
蔵王山〔噴火予報（活火山であることに留意）〕

火山性地震は少ない状態で経過した。火山性微動は観測されなかった。

今期間は火山活動に特段の変化はなかったが、長期的にみると、2013 年以降、火山性地震の増加や火山性微動の発生が観測されており、火山活動はやや高まった状態にあるので、今後の火山活動の推移に注意が必要である。

あづまやま
吾妻山〔火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）〕

19 日に実施した現地調査では、昨年（2015 年）10 月に噴気が確認された大穴火口北西で、新たな複数の弱い噴気を確認した。

大穴火口付近では小規模な噴火が発生する可能性があるので、大穴火口周辺（火口から概ね 500m の範囲）では弾道を描いて飛散する大きな噴石³⁾に警戒が必要である。また、大穴火口の風下側では降灰及び風の影響を受ける小さな噴石³⁾、火山ガスに注意が必要である。

なお、以下に挙げる火山では、火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

いわきさん
岩木山〔噴火予報（活火山であることに留意）〕

はっこうださん
八甲田山〔噴火予報（活火山であることに留意）〕

あきたやけやま
秋田焼山〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

いわてさん
岩手山〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

ちようかいさん
鳥海山〔噴火予報（活火山であることに留意）〕

くりこまやま
栗駒山〔噴火予報（活火山であることに留意）〕

あだたらやま
安達太良山〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

ばんだいさん
磐梯山〔噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）〕

【関東・中部地方及び伊豆・小笠原諸島】 草津白根山くさつしらねさん [火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）]

湯釜火口の北から北東内壁及び水釜火口の北から北東側にかけての斜面で熱活動の活発な状態が継続している。東京工業大学によると、北側噴気地帯のガス組成及び湯釜湖水の化学成分の火山活動の活発化を示す変化や、湯釜の水温が平年よりも高い状態が観測され、継続している。

小規模な噴火が発生する可能性があることから、湯釜火口から概ね 1 km の範囲では、小規模な噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石³⁾ に警戒が必要である。噴火時には、風下側で火山灰や小さな噴石³⁾ が風に流されて降るおそれがあるため注意が必要である。

また、ところどころで火山ガスの噴出が見られ、周辺のくぼ地や谷地形などでは滞留した火山ガスが高濃度になることがあるので、注意が必要である。

あさまやま 浅間山 [火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）]

2015 年 6 月 19 日の噴火後、噴火は観測されていない。

山頂火口からは、白色の噴煙が火口縁上概ね 300m 以下で経過している。火映⁴⁾ は観測されていない。

12 日に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）⁵⁾ の放出量は 1 日あたり 90 トン（前回 4 月 8 日及び 19 日：100～200 トン）と少ない状態で経過している。

23 日に群馬県の協力により実施した上空からの観測、及び 31 日に陸上自衛隊の協力により実施した上空からの観測では、引き続き、山頂火口から白色と青白色の噴煙を観測した。また、これまでの観測と比較して、火口内の地形に大きな変化はなかったが、火口底中央部の火口付近の高温領域が縮小しているのが認められた。

山頂火口直下のごく浅い所を震源とする体を感じない火山性地震は引き続きやや多い状態が続いており、火山活動はやや活発な状態で経過している。発生した地震の多くは BL 型地震（低周波地震）であった。

今後も火口周辺に影響を及ぼす小規模な噴火が発生する可能性があるため、山頂火口から概ね 2 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石³⁾ に警戒が必要である。また、風下側では降灰及び風の影響を受ける小さな噴石³⁾ に注意が必要である。

にいがたけやま 新潟焼山 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

1 日以降、振幅の小さな火山性地震が増加した。2 日以降減少しているが、低周波地震も時々発生している。

6 日の上空からの観測で、山頂東側斜面に、ごく小規模な噴火に伴うものとみられる降灰を確認した。その後、噴火は認められていない。

今後も、想定火口内（山頂から半径 1 km 以内）に影響を及ぼすような噴火が発生するおそれがあるため、火山活動の推移に注意が必要である。

想定火口内は、平成 28 年 3 月 2 日から、地元自治体等により立入規制が実施されている。登山者等は地元自治体等の指示に従って危険な地域には立ち入らないよう注意が必要である。

みだかはら 弥陀ヶ原 [噴火予報（活火山であることに留意）]

弥陀ヶ原近傍の地震は少ない状態で経過している。

以前から熱活動が活発である立山地獄谷では 2012 年 6 月以降の観測で噴気の拡大、活発化や温度の上昇傾向が確認されており、今後の火山活動の推移に注意が必要である。また、この付近では火山ガスに注意が必要である。

おんたけさん 御嶽山 [火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）]

遠望カメラによる観測では、白色の噴煙が火口縁上概ね 900m 以下の高さで経過している。

火山性地震は少ない状態で経過しているが、2014 年 8 月以前の状況には戻っていない。

19 日に火山性微動を観測した。火山性微動を観測したのは、2015 年 7 月以来である。火山性微動発生以降、低周波地震を 3 回観測している。これら火山性微動及び低周波地震の発生時及びその前後で、噴煙や地殻変動の観測データに火山活動の高まりを示す変化はみられていない。

2014 年 10 月以降噴火の発生はなく、火山活動は緩やかな低下傾向が続いている。火口列からの噴煙活動や、地震活動が続いていることから、今後も小規模な噴火が発生する可能性がある。

火口から概ね 1 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石³⁾ に警戒が必要である。風下側では降灰及び風の影響を受ける小さな噴石³⁾ に注意が必要である。

ふじさん 富士山 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

2011 年 3 月 15 日に静岡県東部（富士山の南部付近）で発生したマグニチュード 6.4 の地震以降、地震活動が活発な状況となっていたが、

その後、地震活動は低下してきている。その他の観測データでも浅部の異常を示すものはなく、噴火の兆候は認められない。

はこねやま
箱根山[噴火予報(噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意)]

大涌谷周辺での噴気の高さは概ね 400m 以下で経過している。大涌谷に設置している火口カメラによる観測では、大涌谷の火口や噴気孔及び大涌谷温泉供給施設から引き続き噴気が勢いよく噴出している。

火山性地震の発生は少なく、地震活動は低調に経過している。火山性微動は観測されていない。

GNSS⁷⁾ 連続観測及び気象庁と神奈川県温泉地学研究所が設置している傾斜計⁶⁾ や体積ひずみ計⁸⁾ では、特段の変動はみられていない。

大涌谷周辺の想定火口域では、噴気や火山ガスに引き続き注意が必要である。

いずのおしま
伊豆大島[噴火予報(噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意)]

火山性地震はやや少ない状態で経過している。低周波地震や火山性微動は観測されていない。

20 日に実施した現地調査では、三原山山頂火口内及びその周辺で噴気を引き続き確認した。また、三原山山頂火口内にある中央火孔の最高温度²⁾ は約 32℃で、1999 年以降ほぼ同じレベルで経過している。また、中央火孔内の地表面温度分布²⁾ は、前回（4 月 19 日）の観測と比べて特段の変化は認められない。その他、三原山山頂周辺の噴気温度²⁾ にも特段の変化は認められない。

地殻変動観測では、短期的な膨張や収縮を繰り返しながら、長期的には地下深部へのマグマ供給によると考えられる島全体の膨張傾向が続いている。その他の観測データには特段の変化はなく、噴火の兆候は認められない。

みやけじま
三宅島[噴火予報(噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意)]

11 日 23 時頃から 12 日 03 時頃にかけて火山性微動が発生するとともに、火口の南東から南方向が沈降する傾向の変動が観測された。火山性微動発生後に実施した現地調査では、火口内及びその周辺に新たな噴出物は認められなかった。火山ガス（二酸化硫黄）⁵⁾ の放出量は、長期的には緩やかな減少傾向にあるが、火山性微動の発生後の 12 日に 1 日あたり約 1,200 トン（前回、4 月 12 日：約 80 トン）に増加した。13 日には 1 日あたり約 400 トンに減少し、その後は約 100 トンで経過している。その後火山性

微動は観測されていない。また、12 日、21 日及び 24 日に実施した現地調査では、主火孔内及びその周辺で引き続き高温領域⁴⁾ が認められ、前回の観測（4 月 6 日）と比べて、火口内の地形及び高温領域の分布に特段の変化は認められなかった。

山頂浅部を震源とする火山性地震は概ね少ない状態で経過している。

主火孔における噴煙活動及び火山ガスの放出が継続していることから、火口内では噴出現象が突発的に発生する可能性があるため、山頂火口内及び主火孔から 500m 以内では火山灰噴出に警戒が必要である。また、火山ガスの放出が継続していることから、風下にあたる地域では火山ガスに注意が必要である。

にしのおしま
西之島[火口周辺警戒(入山危険)及び火山現象に関する海上警戒]

4 日に海上保安庁が測量船から実施した調査では、第 7 火口及び火砕丘南斜面噴気帯から白色噴気の連続的な放出が認められた。また、第 7 火口周辺及び火砕丘南側噴気帯には白色及び黄色の硫黄の析出が認められた。熱計測の結果、顕著な高温域は認められなかったが、西之島東地区では周辺と比較して若干温度が高い場所があった。

20 日に海上保安庁が実施した上空からの観測では、第 7 火口から青紫色を帯びた火山ガスの放出が認められた。第 7 火口の火口縁や火砕丘には、硫黄の析出と考えられる複数の黄色領域が確認された。

熱計測画像からは、第 7 火口の火口縁及び火砕丘周辺の溶岩原に地表温度の高い領域が点在していたが、2016 年 3 月 5 日の観測結果と比較して顕著な温度分布の変化等の特異事象は認められなかった。

2013 年 11 月以降、西之島では噴石等を放出する噴火や溶岩の流出が続いていたが、2015 年 11 月下旬以降はいずれも確認されていない。12 月以降は地表面温度の低下が確認されている。今期間に海上保安庁が実施した上空からの観測でも、観測中に噴火は認められなかった。

表面的な活動に低下が認められるものの、これまで 2 年以上活発な火山活動が続いてきたことから、火口から概ね 1.5km 以内では噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石³⁾ に警戒が必要である。また、火口から半径 0.9 海里以内の周辺海域では、噴火による影響が及ぶおそれがあるので、噴火に警戒が必要である。

いおうとう

硫黄島【火口周辺警報（火口周辺危険）及び火山現象に関する海上警報】

火山性地震はやや少ない状態で経過している。調和型及び単色型の火山性微動が 6 回発生した。火山性微動が観測された時間帯に、その他の観測データに異常は認められなかった。

GNSS⁷⁾ 連続観測によると、地殻変動は隆起・停滞を繰り返している。2014 年以降は、島の北部ほど隆起が大きい状態が継続している。

硫黄島の島内は全体に地温が高く、多くの噴気地帯や噴気孔があり、過去には各所で小規模な噴火が発生している。火山活動はやや活発な状態で推移しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火が発生すると予想されるので、従来から小規模な噴火が発生した地点（ミリオンダラーホール（旧噴火口）等）及びその周辺では噴火に警戒が必要である。

ふくとくおかのかのぼ

福徳岡ノ場【噴火警報（周辺海域警戒）及び火山現象に関する海上警報】

海上保安庁海洋情報部、第三管区海上保安本部、海上自衛隊及び気象庁によるこれまでの観測によると、福徳岡ノ場付近の海面には長期にわたり火山活動によるとみられる変色水等が確認されている。

今後も小規模な海底噴火が発生すると予想されるので、周辺海域では噴火に警戒が必要である。

なお、以下に挙げる火山では、火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

なすだけ

那須岳【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】

にっこうしらねさん

日光白根山【噴火予報（活火山であることに留意）】

やけだけ

焼岳【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】

はくさん

白山【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】

のりくらだけ

乗鞍岳【噴火予報（活火山であることに留意）】

いずとうぶかざんぐん

伊豆東部火山群【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】

にいじま

新島【噴火予報（活火山であることに留意）】

こうづしま

神津島【噴火予報（活火山であることに留意）】

はちじょうじま

八丈島【噴火予報（活火山であることに留意）】

あおがしま

青ヶ島【噴火予報（活火山であることに留意）】

【九州地方及び南西諸島】

くじゅうさん

九重山【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められないが、GNSS⁷⁾ 連続観測によると、一部の基線で伸びの傾向が認められるので、今後の火山活動の推移に留意が必要である。

あそさん

阿蘇山【火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）】

中岳第一火口では、1 日 05 時 45 分頃に噴火が発生し、乳白色の噴煙が火口縁上 300m まで上がった。

13 日、19 日及び 24 日に実施した現地調査では、前月に引き続き中岳第一火口内に灰色の湯だまり、ごく小規模な土砂噴出、火口底に高温の噴気孔を確認した。湯だまりの量は、いずれも噴煙のため不明であった。17 日、23 日及び 30 日に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量⁵⁾は、1 日あたり 1,200～2,500 トン（4 月：1,200～2,500 トン）と多い状態であった。

火山性微動の振幅は、4 月 30 日からやや大きな状態で経過していたが、5 月 15 日以降は小さくなった。

火山性地震は少ない状態で経過し、孤立型微動は 16 日以降、概ね多い状態で経過した。

中岳第一火口では、時々小規模な噴火が発生していることから、今後も火口周辺に影響を及ぼす噴火が発生する可能性がある。

火口から概ね 1 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石³⁾ 及び火砕流に警戒が必要である。風下側では降灰及び風の影響を受ける小さな噴石³⁾ に注意が必要である。

うんぜんだけ

雲仙岳【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められないが、長期的には 2010 年頃から火山性地震の活動がやや活発となっているので、今後の火山活動の推移に留意が必要である。

きりしまやま

しんもえだけ

霧島山（新燃岳）【火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）】

新燃岳付近を震源とする火山性地震が時々発生した。

12 日に白色の噴煙が最高で火口縁上 300m まで上がったが、ほとんどは火口内で消散する程度であった。噴煙が火口縁上 300m まで上がったのは、2015 年 7 月 6 日の 400m 以来であった。

13 日に実施した韓国岳山頂からの観測では、火口内及び 2008 年 8 月の噴火で形成された西側斜面の割れ目で、引き続き弱い噴気が認められた。赤外熱映像装置²⁾による観測では、火口内及び西側斜面の割れ目で、やや温度の高い部分が観測されたが、熱異常域の分布に特段の変化は認められなかった。23 日に実施した新湯温泉付近からの観測では、2008 年 8 月の噴火で形成された西側斜面の割れ目では、引き続き弱い噴気が認められた。また、西側斜面の割れ目の下方からも、前回（4 月 20 日）の観測に引き続きごく弱い噴気が上がっていることを確認した。赤外熱映像装置による観測では、噴気が上がっていた周辺で、弱い熱異常域となっていることを確認した。

傾斜計⁶⁾では、「平成 28 年（2016 年）熊本地震」の影響による変化がみられているが、火山活動に特段の変化は認められない。

GNSS⁷⁾連続観測によると、新燃岳の北西数 km の地下深くにあると考えられるマグマだまりの膨張を示す地殻変動は、2015 年 1 月頃から停滞している。また、新燃岳周辺の一部の基線で、2015 年 5 月頃からわずかに伸びの傾向がみられていたが、2015 年 10 月頃から停滞している。

新燃岳では火口周辺に影響を及ぼす小規模な噴火が発生する可能性があるため、新燃岳火口から概ね 1 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石³⁾に警戒が必要である。

風下側では火山灰だけでなく小さな噴石³⁾（火山れき⁹⁾）が風に流されて降るおそれがあるため注意が必要である。

降雨時には、泥石流や土石流に注意が必要である。

霧島山（御鉢）おはち [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

火山性地震は観測されなかった（4 月：6 回）。25 日に継続時間が約 1 分半の振幅の小さな火山性微動を観測した。御鉢で火山性微動を観測したのは 2015 年 11 月 19 日以来である。火山性微動の発生時及びその前後で、噴煙や地殻変動の観測データに火山活動の高まりを示す変化はみられていない。

火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候は認められないが、2015 年 7 月頃から火山性地震の活動がやや活発化しているため、今後の火山活動の推移に注意が必要である。

霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺）おはち [噴火予報（活火山であることに留意）]

火山性地震は時々発生し、月回数は 30 回と前月（4 月：15 回）より増加した。震源は、硫黄

山付近の海拔下 0～1 km に分布した。火山性微動は 2 月 11 日以降、観測されていない。

遠望観測では硫黄山で時々噴気が観測されており、最高で火口縁上 50m まで上がった。

13 日及び 23 日に実施した現地調査では、硫黄山火口内及び火口周辺で引き続き噴気を確認した。赤外熱映像装置²⁾による観測では、熱異常域は前回（4 月 20 日）に比べわずかに広がっていた。硫黄山の火口周辺の噴気地帯は引き続き拡大傾向にあるが、温度や噴気の量に大きな変化は認められない。

なお、硫黄山付近では、これまでと同様に明らかに感じる程度の硫化水素臭を確認した。

火口周辺では火山ガスに注意が必要である。活火山であることから、規模の小さな噴出現象が突発的に発生する可能性があるため、留意が必要である。

桜島 [火口周辺警報（噴火警戒レベル 3、入山規制）]

昭和火口では、活発な噴火活動が継続した。噴火回数は 22 回（4 月：51 回）で、このうち爆発的噴火は 2 回（4 月：15 回）であった。1 日 15 時 36 分の爆発的噴火では、多量の噴煙が火口縁上 4,100m まで上がった。弾道を描いて飛散する大きな噴石³⁾は最大 4 合目（昭和火口より 800 から 1,300m）まで達した。

南岳山頂火口では、噴火を 3 回観測（4 月：1 回）し、13 日 16 時 38 分の噴火では、多量の噴煙が火口縁上 3,700m まで上がった。

18 日に鹿児島市吉野町から実施した赤外熱映像装置²⁾による観測では、桜島の北側斜面から北西側斜面にかけての領域の地表面温度分布に特段の変化は認められなかった。

2 日及び 17 日に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量⁵⁾は 1 日あたり 300～500 トン（4 月：100～600 トン）と概ねやや少ない状態であった。

桜島島内での傾斜計⁶⁾、伸縮計¹⁰⁾による観測では、2015 年 8 月の急激な変動以降、顕著な山体膨張を示す地殻変動はみられていない。一方、桜島島内の伸縮計では爆発的噴火の発生前にはわずかな伸張が、発生直後にはわずかな収縮が観測されている。

GNSS⁷⁾による観測では、始良カルデラ（鹿児島湾奥部）の膨張を示す伸びの傾向が引き続きみられている。島内では、2015 年 8 月の急激な山体膨張の変動以降、山体の収縮傾向がみられていたが、2016 年 1 月頃から停滞している。

昭和火口及び南岳山頂火口から概ね 2 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石³⁾及び火砕流に警戒が必要である。

風下側では火山灰だけでなく小さな噴石³⁾

（火山れき⁹⁾）が遠方まで風に流されて降るため注意が必要である。爆発的噴火に伴う大きな空振によって窓ガラスが割れるなどのおそれがあるため注意が必要である。また、降雨時には土石流に注意が必要である。

さつまのとうじま **薩摩硫黄島 [噴火予報 (噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意)]**

火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められないが、硫黄岳山頂火口では噴煙活動が続いているので、火山灰等が噴出する可能性がある。また、火口付近では火山ガスに注意が必要である。

くちのえらぶじま **口永良部島 [噴火警報 (噴火警戒レベル 5、避難) 及び火山現象に関する海上警報]**

新岳では、2015 年 6 月 19 日の噴火後、噴火は観測されていない。

遠望カメラによる観測では、白色の噴煙が火口縁上 400m まで上がった。

現地調査では、火口周辺の地形や噴気等の状況に変化は見られなかった。また、赤外熱映像装置²⁾による観測では、2015 年 3 月頃から 5 月 29 日の噴火前に温度上昇が認められていた新岳火口西側割れ目付近の領域の温度は、引き続き低下した状態であった。

26 日及び 31 日に海上自衛隊第 1 航空群の協力により実施した上空からの観測では、新岳火口の火口底からわずかに噴気が上がっているのを確認した。また、火口西側の割れ目付近からも噴気が上がっているのを確認した。3 月 11 日の観測と比べて、新岳火口及び火口周辺の形状に特段の変化は認められなかった。

期間中に東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）⁵⁾の放出量は 1 日あたり 100～200 トンと概ねやや少ない状況であった（4 月：70～100 トン）。

火山性地震は少ない状態で経過した。火山性微動は観測されていない。

地殻変動観測では、2015 年 5 月 29 日の噴火以降に特段の変化は認められない。

2015 年 5 月 29 日と同程度の噴火が発生する可能性は低くなっているものの、引き続き噴火の可能性があり、火砕流に警戒が必要である。火砕流の流下による影響が及ぶと予想される屋久島町口永良部島の居住地域（前田地区、向江浜地区）では厳重な警戒（避難等の対応）が必要である。

噴火に伴う大きな噴石³⁾の飛散が予想される新岳火口から概ね 2 km の範囲及び火砕流の流下

による影響が及ぶと予想される新岳火口の西側の概ね 2.5km の範囲では、厳重な警戒（避難等の対応）が必要である。風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石³⁾が風に流されて降るため注意が必要である。

降雨時には土石流の可能性があるので注意が必要である。

新岳火口から半径 1.4 海里以内の周辺海域では、噴火による影響が及ぶおそれがあるので、噴火に警戒が必要である。

すわのせじま **諏訪之瀬島 [火口周辺警報 (噴火警戒レベル 2、火口周辺規制)]**

おたけ
御岳火口では、爆発的噴火が 5 回発生するなど、活発な火山活動が継続した。

今後も火口周辺に影響を及ぼす程度の噴火が発生すると予想されるので、火口から概ね 1 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石³⁾に警戒が必要である。風下側では火山灰だけでなく小さな噴石³⁾が風に流されて降るおそれがあるので注意が必要である。

なお、以下に挙げる火山では、火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

つるみだけ がらみだけ **鶴見岳・伽藍岳 [噴火予報 (活火山であることに留意)]**

- 1) 火山体の南側で全磁力を観測した場合、全磁力値が減少すると火山体内部で温度上昇が、全磁力値が増加すると火山体内部で温度低下が生じていると推定される。
- 2) 赤外熱映像装置は物体が放射する赤外線を感知して温度分布を測定する測器である。熱源から離れた場所から測定することができる利点があるが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合がある。
- 3) 噴石については、大きさによる風の影響の程度の違いによって飛散範囲が大きく異なる。本文中「大きな噴石」とは、「風の影響を受けず弾道を描いて飛散する大きな噴石」のことであり、「小さな噴石」とは、それより小さく「風に流されて降る小さな噴石」のことである。
- 4) 赤熱した溶岩や高温の火山ガス等が、噴煙や雲に映って明るく見える現象。
- 5) 火口から放出される火山ガスには、マグマに溶けていた水蒸気や二酸化硫黄、硫化水素など様々な成分が含まれており、これらのうち、二酸化硫黄はマグマが浅部へ上昇するとその放出量が増加する。気象庁では、二酸化硫黄の放出量を観測し、火山活動の評価に活用している。
- 6) 火山活動による山体の傾きを精密に観測する機器。火山体直下へのマグマの貫入等により変化が観測されることがある。
- 7) GNSS (Global Navigation Satellite Systems) とは、GPS をはじめとする衛星測位システム全般を示す呼称である。
- 8) センサーで周囲の岩盤から受ける力による体積の変化をとらえ、岩石の伸びや縮みを精密に観測する機器。火山体直下へのマグマの貫入等で変化が観測されることがある。
- 9) 霧島山・桜島では「火山れき」の用語が地元で定着していると考えられることから、付加表現している。

- 10) 火山活動による地殻の伸び縮みを観測する機器。マグマ溜まりや火道内の圧力増加によって生じる火口周辺の変化が観測されることがある。